朝日新聞　1992年（平成4年）1月23日

論壇

従軍慰安婦への責任と罪

山谷　哲夫

昨年十二月六日、沖縄県那覇市でペー・ボンギさん(七七)の追悼会があった。ペーさんは一九七五年に、朝鮮人女性で初めて従軍慰安婦だった過去を公表した人である。十月十八日に那覇市内の一人暮らしのアパートで、死体が発見された。死因は心不全だった。

追悼会は、ペーさんを十七年間も世話してきた朝鮮総連沖縄県本部の金委員長夫妻が中心になって開かれ、当日、八十人ものペーさんゆかりの人たちが、会場の八汐荘に集まった。

筆者は七八年八月に、当時、沖縄本島南部の砂糖キビ畑の二畳のバラック小屋に住んでいたペーさんと会い、彼女を主人公にして、記録映画「沖縄のハルモニ・証言・従軍慰安婦」（七九年）を作った。それまで、韓国で従軍慰安婦の取材を続けていたが、「韓国で取材するんではなく、日本の自分の父親に聞け」と、感情的に反発されることが多かった。

くしくもペーさん追悼の日に、金学順さん(六七)たち三人の元朝鮮人従軍慰安婦が、日本政府の戦争責任を追及するために、東京地裁で訴訟を起こした。ペーさんの死と、金学順さんたちの裁判の報道に加え、防衛庁図書館から旧日本軍が慰安婦の募集、監督に直接かかわった資料が新たに発見され、慰安婦の歴史的事実は少しずつ知られはじめてきた。しかし、七七年からこの朝鮮人従軍慰安婦の問題を、細く長く取材している筆者は、まだ明らかにすべき二つの問題が残っていると思う。

その第一は、朝鮮人従軍慰安婦は単に過去の戦争責任だけの問題ではなく、日本人にとって「戦後責任」の、現在の問題でもあることだ。元朝鮮人従軍慰安婦は戦後も、戦中と同じほど、時にはそれ以上に、人にいえない苦難をなめている。

ペーさんの場合、敗戦を沖縄県渡嘉敷島の陣地で日本兵と迎えたが、敗戦後は日本軍からも放り出されている。ペーさんの戦後は米兵や、沖縄の下層労働者相手の売春生活を続けることだった。それは、ペーさんが老いて、精神状態が変調をきたすまで続いた。

第二は、従来は朝鮮人従軍慰安婦は未婚女性がほとんどだといわれていたが、実際は既婚者、子持ちの女性が意外に多かった事実である。よけいに罪が重い。このことは、当時、山口県労務報国会下関支部の動員部長で、千人近くの朝鮮人従軍慰安婦を連行した吉田清治さん(七七)が証言している。「三、四歳の子供が若い母親に泣きながらしがみついてもいました。そんな子供たちを近くにいる年とった女性に渡し、若い母親の手をねじ上げ、けったり殴ったりして護送車に乗せるのです」（九一年十月十日　朝日新聞大阪版）

ペーさん自身が、朝鮮での結婚経験者である。そして、渡嘉敷島の他の六人の慰安婦も既婚者、そして子持ち女性が多かったと推測される。象徴的なのは全羅道出身の「はるこ」（二十二歳前後）と呼ばれた美人の慰安婦である。二歳の娘を祖母に預けて、だまされて来たという。四五年三月の空襲で、「はるこ」は死んでいる。その遺骨は不明である。娘が生きていれば四十七、八歳になる。母が慰安婦として死んだ事実を聞かされているのか。

韓国訪問のさい、宮沢首相は慰安婦問題で、「おわびと反省の気持ちを申し上げる」と謝罪の意を明言した。しかし、その半面、「PKO協力法」（国連平和維持活動協力法）に韓国国民の理解を求めてもいる。宮沢首相は事実上の海外派兵であるPKO法案を持ち出す前に、まず、前記の朝鮮人従軍慰安婦の二つの問題をもっと明らかにする義務がある。

近代国家で、公営の売春婦を抱えて戦争したのは、日本だけである。ペーさんの死ぬまで続いた口ぐせが、心に残る。「恨みをはらしてください」

（映画監督）